

讀 第 三 十 八 號  
寄 附 者  
藏 書 印

特別  
13  
3521  
7





13  
3521  
卷

播磨國 篠原 千場  
縣令佐門之助  
松前  
篠原 千場  
篠原 千場  
篠原 千場  
篠原 千場

昭和二十九年  
七月十九日  
東京



淀屋新話卷之七

卯木鳥代官

東武 岳亭主人 戲編



井戸屋が家内の滝多のん親子との忠八が帰りを久しく待  
どの更み音信あつらふれが太最心な懸う今のとて滝五郎奴  
子二人を引俣して必死ち吾家を走りいで忠八を迎へよとて高  
毎が方へ急死がう斯て神寄川のやうに到りたると死前にお立  
ころ奴子さること物おつたつら提灯で〜一紙々見ぬ日死  
忠八が死骸めて肩さたつら袈裟がけぬ伐して死する滝五郎  
大のふ救馬死借の何ゆの死爲と甘方とを伺ひ見ぬが一邊

金澤市古巻



小彼得平が棟きつろく一棟盛あり其蓋のひくけて中物多し  
儲の得平が死爲めて忠八を殺し黄金の雜を奪ひ取て逃  
去つろ左右まづ高井無が家小行ては実否をさぐれば一と  
人の奴子を爰に残しおれ宅原が宅のうけせの滝五郎が  
来りつと波うらむ小笹の嬉しく飛で出けるどく久しく音信  
も死恨を言んとあし死お思ひさう死忠八が殺されて黄金の  
雜を奪ひぬくと滝五郎が物ぐるをさて小笹もたのめ忙  
し或る殊お得平が死爲るうんとおふぞ増々心も意もは  
然も高井無の詩會小行て家小あつた小笹の一向心を勞め婢  
女とて近よめまきせ急小一人の男を雇ひ高井無と迎へお

遣つろ滝五郎のめづる彼死へ把てあつて日五口家おの知  
せり其地の莊官小も是と云とけりお土地の者どの  
出来りけお景を刃てたの小駭き騒ぎとて頻て一封の訃  
牒をまづめ其夜の中お縣令の廳小訃へたる井戸屋お  
も追々小人々馳集はる高井無も飯り来りけ一件の夏を空  
て平天あはせと感ひつろ次の朝まゝ死お縣令の下司二人  
来り忠八が死骸を未女とて查勘滝五郎高井無ホがら  
逐件小書とて己の時をあつ小帰りつろ滝五郎の忠八  
が死骸を家小荷せ飯り先飯小御寺小葬り然りて縣  
令の廳小一五十一を言上お及びつろ大滝左門之佐逐件小



是とぞをとり抑は二件の事初めより考らふ座塚の中  
 小埋ありあつゝの戯れあるまゝと申すも思はずは又極めて  
 紫雲黄ひあはばしと黄金の雞もつとも必定せし然して又  
 忠八を殺せしも得平との云ふ事とも架波かひの伐り手  
 列せし心得ありのめやう小下司が目利する是も恐らく  
 の別人のやと思ひし事得平其場より行方あはざるを以  
 暫く渠を罪人となしあはらう然し遠くは本人ともを捜  
 つと出し金雞をも尋す事遣りたぐと云ふと曰ひらるゝゆで滝五  
 郎高舞ホの懸令の命をたぐとて竟小廳前を退たらう  
 然して後も佐門の佐の只官心とそくは罪人を捜さむその

いも更み手がらも有さうらう卯木佐和孫太の黄金の  
 雞とて飯へ吾居室の裡の奥まうらう死小深く隠し  
 あり空知ぬめりて居らうと誰知りのも無くけり斯て  
 春さる廿又過て秋の末ふりけり或日都より上使とて  
 一人の早騎飛がごとく小駈まり縣令左門に佐小對面と謂  
 て曰く今この近江の国に賊徒蜂起し郡縣をかたむらさ  
 急らるゝゆりて在京の人々の疾討手ゆ向りて大痛と  
 のふも疾軍兵を引つて今報の軍役ふ如りてとて侍  
 軍の嚴命まうとて御用意あはるゝとて執吏の御ま  
 と出らるゝゆぞ左門の佐謹んば是を拜し命令かゝる侍



早く早速出立つるまゝとんとどろき各へつる上使の再度テ々々  
 やう小生の是はよう和泉河内の人々へ此催使の来りたる  
 が卒脚いとる給り〜んと勿心し馬小打乗て飛がごとく小駈さる  
 る左門の佐是を留めて早卒小家中へ觸まると軍あるの  
 る即ホどもに残りまゝ俱つてとんと命にける家中  
 の面々を留めて俄小さとた立個々支度ととの人々左  
 門の佐も其夜の中ぬ武具馬具ととりそろへ嚴重出立  
 て勤て卯木佐和弥太をよび出して曰やう吾は度將軍の命  
 によりて近江の国へ賊徒退治お赴くまじが唯今より出陣  
 するまゝ汝も俱おめ〜列んとお思ひ〜おの餘の支家より出

くる者もどが軍の支の奈何とんと思ふをめて家小らめ  
 お〜ぞう〜今より汝跡おのころ吾代官をとめて能政支を  
 たり行へよたのる訟へ支六借き公支おのりての日をのべと  
 我歸りをまへ〜僅なる支とぬの汝が心小任せて執さるたい  
 ことば〜些些女も我使のさる死僻支とぬ返へ〜は餘平日さ  
 我前小て郡令の支を辨びる小頗る理うけ當はるること多死  
 とめては役を餘小諾はるまう是のりも心を確死て大郎小つ  
 とあよま〜と曰はるれを佐和弥太の是を留めて頭を骨小まを  
 つつけて是はあ難死命を蒙り侍ふ者多視影ごふる死小  
 生小假令暫〜の間ま〜この斯る大官を命に玉りつ支取も





皇都の山

山



鞭をうけて  
大滝  
皇都の  
山

山



かゝる御直下侍へ命お從ひゆく心を用ひて勤め侍るべし  
とぞ吞へたる斯て左門の佐の其曉の頃ちひより数々の郎  
等引ついで難速の浦を立ち出て洛陽をさしてそ吞せぬる  
斯り、後の卯木佐和弥太暫く縣令の代官となりて日毎  
願前ふさぐんで直を執さむく小ぞ有るる御高の年佐和弥  
太古井と穿ちて妻くの人を損ひし時雇ひ全と迫りて  
大勢の者のうち時ふらしての訟へ直ありて縣令ふら  
佐和弥太が願前ふあるを見て大の小警馬さ退いて後密ふ  
曰やう彼卯木の原末心ざ々善くかくざる者ふして御高を  
吾妻屋が古井と穿ちて妻くの人を損ひは難波と逐電

つる者るるがの程ゆる又は死ぬまうて却て縣令の代  
官とるる寔ふ人の心の善悪ぬかすは出世とらふ直し有  
ものぞかゝと嘆息しとぞ語り取り死

滝五継家督

身小近く秋や来ぬらん見る俣小青葉の山も接るひあけ  
つと彼源氏ゆも詠けけん爰小高年が娘の小笹の滝五  
郎と深き勘ちを結びら親ままでの商議このひは死  
小婚姻あふたとち小奴子得平が忠八を殺して黄金の  
雞を奪ひて夏より婚姻の沙汰もまどく絶て割さへ言信  
もうとくくく行て滝五郎も更ぬまらば小笹の穂の泪



小つゆ夏身うたと何なんとて橋たしのよるの物ものたうも絶ことたてて彼かみ古歌  
 小つ入こつ見みえさうり〜誰たれとてさうり〜は深ふか深ふかた交まじ  
 の宿やど小鳴こならん泣なけり外あはのよるてお尋たず々として暮く暮くは頃ころ  
 まこゆの滝たき五郎ごろうの神かみ寄よの花はな街まちめて吾妻ごまとりの遊あそ女をを揚あ  
 誥つめゆ〜て置おきと古こ夏なつゆいさく〜や〜悲かな〜〜彼かみ唐土たうどの上うへ陽やう  
 人ゆんとゆゆも勝かる身みの上うへと平ひら天てんまけたて日ひを送おくるぬ古こ人じん曾そう  
 て二ふたろ古こ夏なつありま古こ夏なつの日ひ日ひ小こ志しと志しろく夏なつの速すみく小こま〜と井い  
 戸屋と滝たき五郎ごろうの去いる頃ころ黄わう金こんの難なんを失うひて甘あま程ほどの心こころ地ちらづ  
 らり〜〜思おもひ居いる〜〜も原もと来きた金かね銀ぎんを失うへる程ほど小このあ  
 志し家の増ま々ま栄ええ行ゆて王わう愷かいが富とみゆの勝かる石い崇たかが本もと有ありぬも

劣せうらば万まん般ぱん心しんの尽まらうけらぬぞ竟つひ小この金かね難なんのまをま心こころの果は果は  
 又またば不ふど平ひら天てん五ご妻さいが夏なつ小この心こころを或ま心こころけら然しかゆ〜も是こゝ  
 滝たき五郎ごろうが心こころ道みちの〜〜節ふしらるゑ死しあり假かり令しるし五ご妻さい美み人ひと小こ非ひ  
 きて醜みにく女をさゆ〜と首くびめ旋ま屋や形かたちめて結むす号ごうあり後のち土つちのこ  
 小このまら〜古こ井いより夏なつく黄わう金こんを得える〜とひ其その五ご妻さい  
 屋やの娘むすめ小こて斯か零ち落おる者ものさゆ何なんぞ能あたるのを見み捨する  
 や斯から〜と沙さの滝たき五郎ごろう或ある日ひ父ちちの滝たきさゆ人ひと小こ向むかひ彼かみ吾妻ごま  
 が身みの上うへの夏なつ幼おと稚ちの時とき結むす号ごうめてあり〜夏なつ又また〜のあつま  
 や東あづま作さくが娘むすめさう〜とまで委あ〜〜語こと願ねがひ五ご妻さいを従したが良よし  
 て正ただ室むろ〜とるはべた〜語こと〜の滝たきさゆ人ひと小こ頭あたま持もちつて不ふ〜



夫の宜くかゞび汝一とび宅原が娘小笹と縁きりあり既  
 小婚姻をもる足べた死ううと高無が奴子得至忠八  
 を殺し一黄金の疾鳥をうむひ逃去し小よつて斯世引の  
 及べうまはる得平が死鳥の有り有べううはこ縣令小も日ひ  
 くの遠くくは彼盗人も尋ひひききと金雜の家小飯  
 吉明らう小るうい及た其時再度小笹を嫁うて汝が  
 妻とるはべたうう又彼五妻を嫁うて本室とはるうとた  
 深が家の古井の金吾家小入るを告知故小深威をつ  
 ひて我徒を働うんひ必定せう牝雑朝はる則其御るは  
 害あり古人も言らうう一夫とての堪べううと太何せん

彼五妻暫一ううと小旃女とらうて許友の人小逢つる女  
 を汝が妻とはるうと死は是家を汚は小當はる去たうて吾  
 妻と見え捨る吉もるううかかか唯速く小従良と相應  
 の昔の金を付与ううた智をそび把て吾妻屋の家を起  
 させうの那ぞ別小僻吉ううんや構へてく吾妻女が受の思  
 ひ断ねとのひるう小ぞ滝五郎たの力をおとく黙然とて  
 退るうう老頭の道八次の間小は吉を岡居ううり其夜  
 滝五郎を人うた死おまひ死て密く小云やう郎君はと吾  
 妻ら吉を思ひ悩とのふと吾偏よく是を知と左右吾妻  
 を本室小嫁り玉のんと思ひあり旦何吉もさう置て疾う



家督を相續して父君を隠居せさせぬ即君家督言と多  
アと手の上うけは御家の千万兩の皆即君のゆゑの其時  
の計りの黄金をつひかしてつらと五世を従良一本空  
ろめ入然して小笹の妻ふらうとも又外お嫁させぬとも  
らりけ道八が心おあせが管心心を勞めぬも倘は更を能  
思ひぬりて吾備富妻那の辨をあらひて父君ふとれて御隠  
居を侑むべと云々ふぞ滝五郎太のお情び然が汝五郎  
めお父君小説まわらせては更を整へ兵よ就成が休ぬも重  
く因心賞を贈るべと答へたるふぞ道八も又つらこび次の日  
地お滝ぬぬんぬけ更を侑めたるが滝ぬぬん元末斯と思ひ

居つる時ふが早速小笹らのひ顔て吉日を撰びて家督  
相續の規式をより行ひ一宗親族をも呼集りて相續披  
露の酒宴をひつら万歳らくとぞ誼ひたる是より後滝  
ぬぬん土藏の裡の黄白を残り多く木直勘て滝五郎ふとこ  
一其身に同い家の片隅お此一の別室を執行とを隠  
居とささるめ茶の湯湯連敷をこのとより一向お活業の更店頭  
の更ぬぬかろつらと倅然とつら居つらつら

滝五采神楽

斯て滝五郎の家を統てよう旦何なる一箇の施をるして各  
を後代お残さむやと思ひ廻つらけるが井戸屋の家の北の方



一流の大河あり西北に赴かんと思ふゆゑは川を遙く廻りて  
 渡り行ふぞ滝五郎風と思ひ付ては死ふ一箇の橋をかゝるる  
 を極めてたのめる功德ありと思ひ夫より急小橋番匠の命  
 いて早卒小普請を執行するが百日をありて漸く橋  
 普請とつくりしに夫より人を渡し初めたるが往來の旅人  
 是をとりてたの小道の近くるるを大最喜怡あつたり  
 然ちゆやけ橋を井戸屋橋とせん呼るる或の横鉋りて  
 井をよに誤ちる呼る人も妻のけり或時老頭の道八滝五  
 郎云やう最早時分のありかゝる疾々吾妻が浴槽  
 へへ前進するぞ原來待りて滝五郎たの小信び

然バ汝旦く死やうの漏心徒にぬれよと頼まけりて道八を其日  
 ちち小神寺可小到り若木屋の長け合百般と商議し  
 て竟小吾妻が身の代八百兩とせり滝五郎の千兩と云  
 る一爰小二百兩の設けを其外方般のめめ此百二とつ  
 徳をうり期て本月十五日花街の産社明神の御祭祀とい  
 ひ時の日の黄道吉日といひけ日と浴槽の日とせり一日思山  
 古山が方へ吾妻を引り古仙が娘がんで改めて婚姻  
 をと結ぶべと商議仔細ふらひひるふと古仙が吾妻に  
 ころは豫て恨ある高希を他ふる吾妻今井は三の君  
 尊とある日未の念願とせり一更と天を拜し地を拜し在羅



してぞ勇まけり然して其日到了るは朝まゝに道八滝  
 五郎即より吾妻が身の代金千両を受とり頓て花街へ出行  
 しが昼のしぢゆ立飯う滝五郎小向ひ云々やう倦し即歌  
 今日五郎妻を徒良のゆの上のけ後うら曲病がよひや止め  
 べー然に今より神奇小到りゆひ生屋の坊び堅め小花街  
 中ゆ總花をちぢゆめい假令何千金費用まつとも今日一日  
 を是を厭はば黄金の山を壅とて井戸屋の徒良と名を  
 のこ後世までも耻くめやうふゆい然しては放  
 蕩をとままり生屋花街を見ゆめへうは是小生が御異見  
 して侍まつと云々小ぞ滝五郎打點頭汝が思ひ入るよ三言

心小悦つ然に今より花街ふりゆ一花ちぢて帰るべ  
 汝の我小代りて家小残り店頭のこを頼むると云捨て  
 忽ち小支度をとめへ神奇さうてど急にたる爰小神奇の  
 花街の者どもに豫て通ハガ分付小ようて揚屋のあつて  
 の長小の袴ひれりけ大門より外二丁やと迎へ小出て滝五  
 郎を待受らう其外に古仙をそぐめ数妾の幫間歌妓  
 ども二三百人引つれたり小出て待むる滝五郎曲輪小  
 近づれたるは揚屋の主人と其の長のされたより爰小待居  
 らう大門小到りたるは数妾の幫間小さうして滝大さ蓋  
 の御入るぞと呼りたるは曲輪の者ども一同小まう迎へ出



むうへ頓て揚屋へともろひ入元来花街中總揚の夏る沙  
 勿心ちふ大門の扉をきく外の客人を一人も通さずは曲曲の中  
 の土の間の軒より軒小到るまで数方枚の花莖とさるも漣  
 を志れたつね何せの家より何せへ行小の草履をさるは木  
 履もく素足ふ走りころとも土を踏ささくふく唯二回の  
 花野をら秋の錦を踏さく又紅海を渡うがごとく期く  
 家毎の主へち妻女兒やうて中居数々の舞女あは造  
 うぶる個々よそそひを濃く錦をうざう花壇のう人小座を  
 まうけ滝大盡お拜謁して慶賀のどるふるん教百人の  
 教妓帯間糸竹のまへを合せ躍り歩た騒き巡り教を

西の良味をさるび酒の下若小芳らぬ池丹豆のうさ死め  
 送ふをあり山と重ね海とくへ滝大盡を待管さる彼射討  
 酒池肉林奏の始皇の阿房殿棟を放ちて存びせし  
 元宗帝の御幸小も長う芳らぬ光景ふて人眼を投駕  
 うせり吾妻も俱小挺ひを整へて滝五郎が傍小座く夏  
 りの人の礼を受る不血の敷廻るち小滝五郎も大酔く帯  
 間亦小謂て曰く吾今宵くるこの見納めるは何なりとせ  
 奇らうた存ひをせよ吾心小留ふるの奇なる存びを安ん  
 つるを賞金に望まろ小任はぐと大盡お呼りつるは教々の  
 封印亦暫く考へ一人が言るやう儲能更を侍ふる傳







へそく出雲の国の御祀り小の国造を神とあがらし神楽の  
 母て并にとうや今滝大盡は廓の氏神るう今日今日の儀  
 産神の免免祀るむが滝大盡を国造小るう人神楽小のせて  
 曲輪の中をうぐた歩た人々小拜まてう滝大盡の神楽の裡  
 よう人々小福をさうけあひるは是は何よりの能尉心小の侍り  
 やと云々むが滝五郎是とあて情んで謂て曰く借の汝の智  
 恵者るうよた夏と思ひ舟舟を然を疾神楽とめてまめ  
 吾今宵神とらうて廓中の者どもの小福をさうけ遣はるうと  
 云々小ぞ借こそ御意小怒るうと疾神楽とめてまめと強  
 ぎらうて走う行廿時あうて一人の封間封間は不ど狂言狂言の用ひて

る冠装束さうぬきるう持まう滝五郎滝五郎小着せかあう時う神  
 前の御樂とあがた持まう滝五郎滝五郎の装束を善か人冠を正し  
 神樂の中央ふのう投むが封間封間らたせの是と昇昇き氏神さ  
 まの御通りぞや下小居よと呼ううう曲廻中をわり歩く家  
 家の老若男女皆のぞく拜拜伏さむが滝五郎の神樂の裡  
 よう吾の則ち井戸屋大明神るう汝ホうう吾をいのる小  
 ようて唯今福を授るうとたのうる裏の裡よう裏黄の白小玉  
 とつらと出出搔搔とくと時ちうせが老若男女をせ集り倒  
 つ轉轉つ是を拾拾滝五郎の面白がうて増々黄金とを時ち  
 せの時時兩小木の葉の散あうとく男女が拾拾入光景の追離の



豆小異るるは虚空小花の音楽ひびく月宮天女の舞より  
も黄金の花をのりせの滝大神の思かくこそ最もかこく  
尊々むと幫間木が工智愛小夜の更るとも知さるる

卯木縛滝五

山泉の下ゆの玉を以て鳥を抵彭蠡の濱の魚を以て大  
小食と中華の史の云くけん井戸屋滝五郎の身  
小敗宝あり餘はバ斯えせとを鳥出して衣冠を正し神楽  
小乗と曲輪の裡を兼回り金銀を時ちくは轆支幫間の  
者どもい面白さの奥小乗が竟ふ大門より外へ出町家の  
間をかぐた歩た村方御分へ走り入能さや兆さやとさるた

立躍り廻うて歩くふぞ農夫ども是を笑みては深更も何  
まどぞ驚たて起いで見とが衣冠正し人神楽小乗と  
さるる提灯星の若く数百人の男ども神楽を昇た躍り  
さるたたまるふぞ農夫ら怒つて左右のそんとはる間小神  
楽の裡よりさるくと黄金をまきまたた散けける程小農  
夫ら再度おどろた喜怡さる福の神の脚通りさるぞ昔  
も未だ爺も未だと呼出つ同いやく小脚楽ふとるた  
外の村々右々死々ひはるまうて歩きし彼山門の山法  
師が坂本の神楽をかぐた洛中ふりては斯まふふいよ  
も有いと人々怪しむ忙さる農夫もはまはく加り幫間



らのいよく騒ぎ跡先の考へるく平等狂ひて歩行する小  
 ぞ今の神山奇の曲偏より二里をちり遠く行て夜のいづく  
 明小くう彼雪の日小友ととひ一王之融みの引かて夜明け  
 ても尚奥つたは不去は休めて住吉へ御参詣のうふふ  
 へを障六蓋是をゆめて是あゆりろ一疾やとと指揮小従  
 みたせのどの再度神雲を見あげて名古の傍邊を直  
 直ふようたがり住吉さうと騒ぎゆく途中の老若男女その  
 何まゆる有らんと驚き忙る計りうけ時住吉の方より  
 縣令の司人とおぼしけ一群の人数出来ぬ前ふはくそ  
 一人の衣服両刀爽ふ小打おて野袴小陣襖を著し七八

人の担子と引卒整言端の甚高やう小先を拂をせまふり  
 々々騒ぎ立てる大勢なるは一点をかりも耳ふのくは躍  
 王廻りて行過くとは一人の担子大音小呼りて曰くは死  
 へ揚輿ふりて来らうの神主との見えは日今日はるをり  
 小祭礼も有ともおぼは抑何人うやと問ふは一人口轉  
 手幫問答てのいやく是の神奇の廓の氏神井戸屋滝  
 大明神今日住吉口へ御通行り信心の徒等小の福を授  
 け玉のまうぞ速う小二拜せよとぞ呼りうらう彼縣令の司人  
 是を答て方小怒つて曰く偕の咄及び井戸屋滝五郎  
 小て有らう彼奴はるど吾妻とのつる劫情を揚言ゆて



おくとついでに昨日宵神さたのたびめ身がいの斯るえせど  
をさしつらと覚えつらその左まゆと右まゆと平人の身と  
裏小乗に冠り装束を着しつらのは是甚だは罪人なり疾  
縄かけよと指揮しつらば発つて入て担子の者ども困々  
鉄策をひらめりして大勢の者どもを片端より打倒に  
農夫らひささつらつ幫間轎夫も狼狽つ四方小乱も  
迷惑ふと担子らひ八方小身を配り當り次ぎふち伏  
ろろ小ぞ大勢の者ども平驚き神樂の其伝まで置  
右住左住小逃ちつら一人も居ほつらふつら担子ホの神  
樂の裡より滝五郎を引出し冠装束を扯かまづり勿心ち

高千小手小縛めつら今更ふまろし縣令の司人足則  
ち卯木佐和弥太つら今曉つら住吉へ赤詰し帰ん  
とつら死ふ勿心ち井戸屋滝五郎が斯る形勢を覚えて借こ  
そ縄をかけつらつら滝五郎は酒の酔漸くさめ後悔  
の泪散乱つらつらとどの奈何とも詮術なく彼呂洞窟  
が栄花の夢勿心ち小覚えまつて縛縄のうた目を目を  
極つらつら悲し生ほと斯るまをやりつらつら佐和弥大心  
中思ふやう遠断古井戸にて多くの金をと設け驕奢  
を極め斯のごた罪を犯し今彼奴を吾手小捉つらつら  
死罪の神めて仇を復ほつらつら小似つらつらつら是

全書集言書卷之七

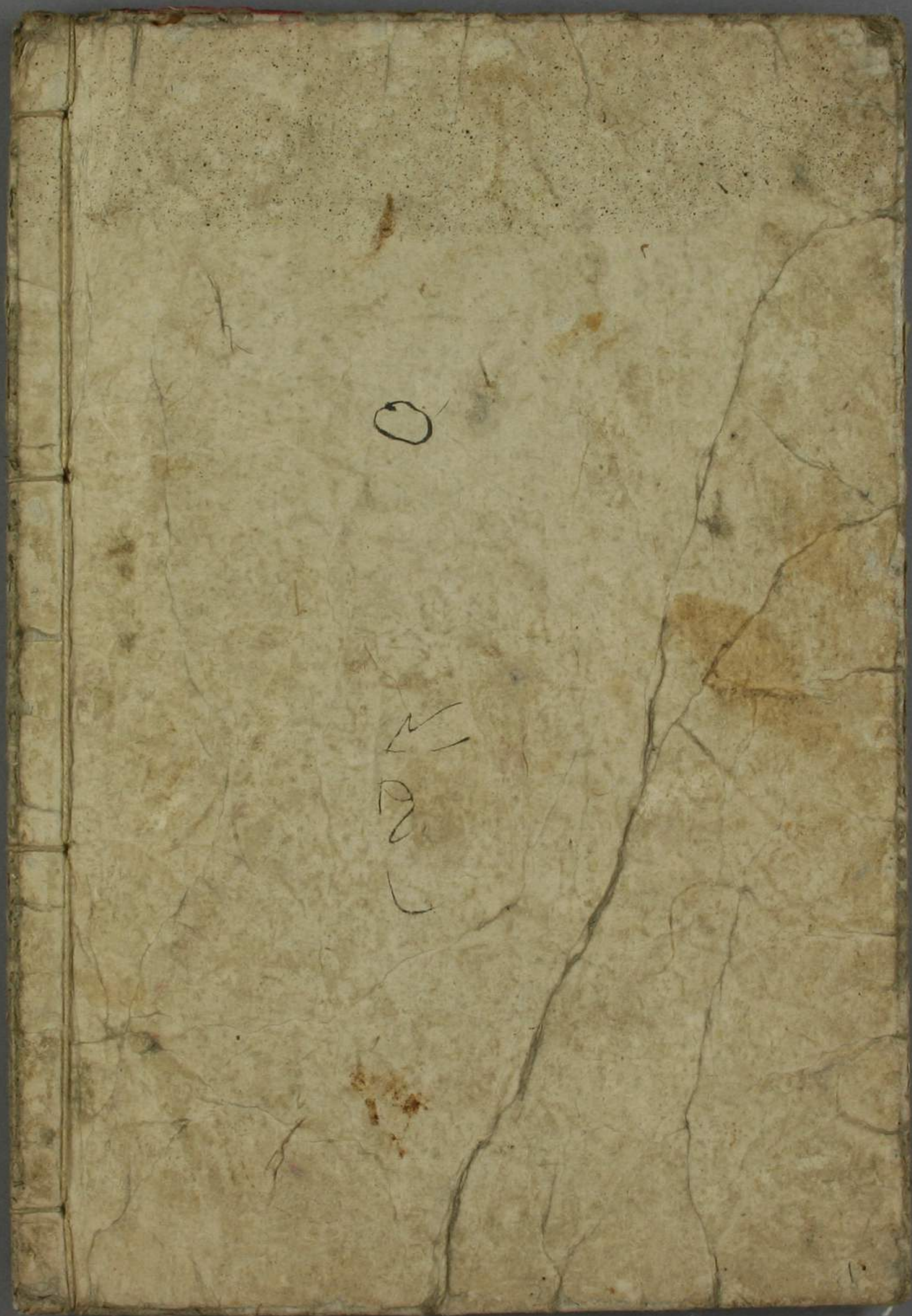
七



心こころ地ち下したにこままりりかかとと心こころ水みづ深ふかくく喜よろこ怡ひつつ滝たき五ご郎らうをを  
引ひ立たさせさせ縣せん令ののの鼓つづみみどど帰かえりりななりり

淀屋形金雞新語卷之七 早





O

227